立命館大学国際言語文化研究所創設10周年記念・国際シンポジウム
二十一世紀的世界と多言語・多文化主義

第一部：1920年代文化のクレオール性とは何であったか

1998年11月2日（月）・末川記念会館ホール

多民族協和の夢が1920年代ほど声高に叫ばれた時代はない。

二十一世紀の多文化・多個人共生の望むべきありようをさぐる上で，私たちは1920年代の希望と絶望の予感に対して，それを正しくふりかえる努力を怠るべきではない。

合衆国からお迎えするシルバーバークさんは大正･昭和期大衆文化研究の第一人者で，主著『チェンジング・ソング』では中野重治の世界性を鮮やかに描き出された。二十世紀研究の大枠の中に，日本文化研究を正しく位置づける糸口を彼女とともにさぐりたい。

発話・コーデイネーター：

西成彦（立命館大学）「雑種的思考の可能性について」

ゲスト・スピーカー：

ミリアム・シルバーバーグ（UCLA）「日本 モダン モンタージュ ― パロディのアイロニー」

パネラー：

今福龍太（札幌大学）「ブラジルから沖縄へ」

米山裕（立命館大学）「定着とディアスポラ：戦間期の日系移民社会」

湊圭史（立命館大学文学研究科）「ラングストン・ヒューズの1930年代の詩における複数的な政治的遠近法」

コメンテーター：

林淑美（日本近代文学研究）／細見和之（大阪府立大学）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

鄭暎恵（広島修道大学）／レベッカ・ジェニスン（京都精華大学）／崎山政毅（神戸市外国語大学）／岡真理（東京外国語大学非常勤講師）／トリン T.ミンハ（カリフォルニア大学バークレー校）／ギヤン・プラカーシュ（プリンストン大学）